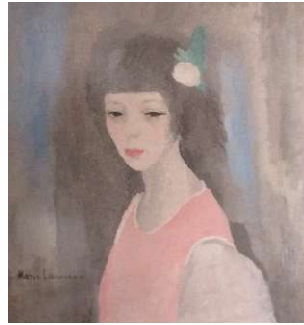


マリー・ローランサンとモード

Bunkamura ザ・ミュージアム(渋谷) 23.02.14~04.09

1920年代のパリは、「レ・ザネ・フォル(狂乱の時代)」と呼ばれ、この時代は女性達が目覚ましく活躍していて、その代表的な存在が画家の「マリー・ローランサン」とファッションデザイナー「ココ・シャネル」であった。

「マリー・ローランサン」は、初期にキュビズムの影響を強く受けた作風であったものの、やがてパステル調の淡い色調と優美なフォルムを特徴とする作風へと変化した。一方、マリー・ローランサンと同年配(1883年生まれ)の「ココ・シャネル」は、従来は男性服に用いられていた素材やスポーツウエアを女性服に取り入れて、1920年代における活動的な女性像の流行を先導した。



マリー・ローランサン 《ばらの女》 1930年 油彩/カンヴァス 左図
マリーにとって「花を持つ女性」というモチーフは、生涯にわたって繰り返し描いた大切なもので、中でも本作は、大輪の薔薇を手にして振り返ったなめらかな白い肌の少女を描いていて、充実した華やかさにあふれている。

マリー・ローランサン 《わたしの肖像》 1924年 油彩/カンヴァス 右図
41歳の自画像で、髪を短く切った優雅な表情は落ち着き自信に満ちている。



カブリエル・シャネル 《帽子》 1910年代 左

マドレーヌ・ヴィオネ 《イブニングドレス》 1938年 中

セシル・ピートン 《お気に入りのドレスでポーズをとるローランサン》 1928年